



ヘンドリック・ゴーデンカー

株式会社JERA
元代表取締役会長
現シニアアドバイザー

バブル期以後に保守化した経営方針を
「カイゼン」しリスクテイキングすることで
日本企業は再び強くなる

世界のエネルギー情勢が脱炭素化へ大きく転換する中、資源に乏しい日本は多角的な戦略が求められている。エネルギーを安定的、効率的、環境的に供給するためには何が必要か。そのために克服するべき課題とは何か。わずか10年にして日本最大の発電会社に成長したJERAの礎を築いた元会長ヘンドリック・ゴーデンカー氏に、グローバルな視点に立ったベストなエネルギー戦略と、ガバナンスの専門家として日本企業が発展を遂げるためのアドバイスを聞いた。

日本企業からの案件を多く手がけた
外国法事務弁護士として活躍

伊藤 本日は、東京を拠点に外国法事務弁護士として活躍

ゴーデンカー 実は日本とは弁護士になる前から

ご縁がありました。1970年代、偶然ですが大企業から伺えますでしょか。

学生のときに日本でホームステイしたことがあります。大学時代に妻と出会い、1981年に卒業するとすぐに結婚して日本に引っ越してきました。

伊藤 奥様は日本の方ですか。

ゴーデンカー アメリカ人です。彼女はロータリー財団の奨学金をもらって日本の大学で日本語を勉強していました。私のほうは東京のコンサルティング会社の仕事を見つけて、日本の大企業が発行する株主コミュニケーションツールの英語版を編集していました。

ちょうどその頃、日本の会社が海外市場で資金調達を始めているのですが、日本語の資料を直訳したものしかなくて、海外の株主や投資家とうまくコミュニケーションでできていなかったのです。そこでその会社が間に入り、私は英語の年報や毎日の報告書、経済の報告書の作成や、JETROのパンフレットの編集などを担当しました。おかげで幅広く日本のビジネスを学べました。その仕事 자체は面白かったのですが、私としてはプロフェッショナルになりたいと思ったのです。それでアメリカに戻ってコロンビア大学のロースクー

父の垣根を超えて絆で結ばれていた時期がありました。「日本の援助がなかつたら、中国経済は今のようにはなつていなかつた。きっと再び良い関係になる機会があります」。そう語るゴーデンカー氏の言葉は穏やかで愛情に満ち溢れている。

アメリカとオランダの2つの国にルーツを持ち、父親の仕事の関係でアフリカに住んだこともあるというヘンドリック・ゴーデンカー氏。この人の幼い日から培われた広い視野と、日本のビジネスについての豊富な知識、弁護士としての秀でた能力のどれ一つ欠いても、日本発祥のエネルギー会社JERAは短期間に世界的企業には成長できなかつたであろう。

忘れられない出来事に挙げたのが、2018年に招待された日中平和友好条約締結40周年記念セレブションだった。北京の人民大会堂に政府機関や外交機関、企業、個人が2000人ぐらい集まり、日本と中国が一緒にやつたことを振り返つて旧交を温めた。「40年前に地方の工場の壊れた設備と一緒に修理しましたね」「電車とバスを乗り継いで、2日以上かかつたけれど復旧できた時はうれしかった」。そんな声があちこちから聞こえて、温かい関係を感じたという。

今日の中関係はぎくしゃくしているが、かつては国の中根を超えて絆で結ばれていた時期がありました。「日本の援助がなかつたら、中国経済は今のようにはなつていなかつた。きっと再び良い関係になる機会があります」。そう語るゴーデンカー氏の言葉は穏やかで愛情に満ち溢れている。